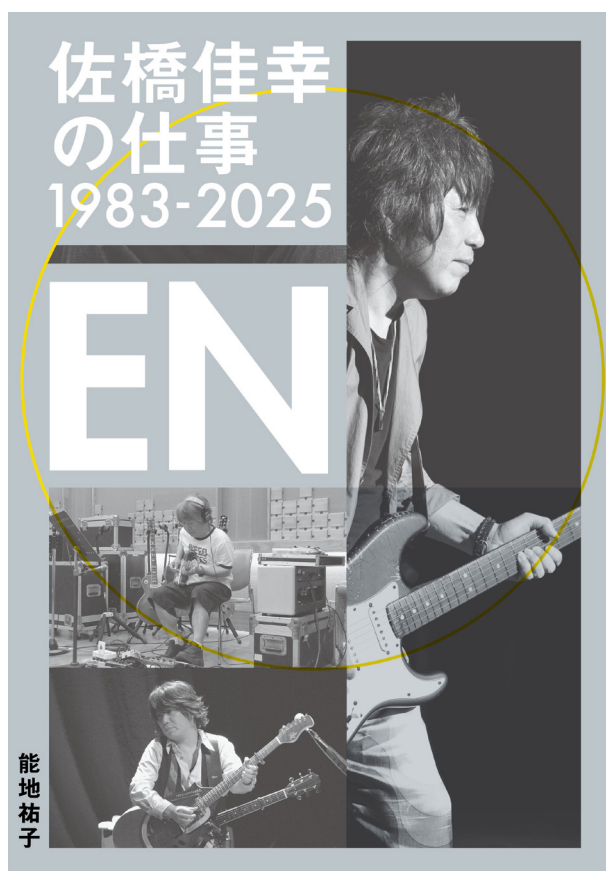


各 位

2025 年 5 月 20 日
株式会社リットーミュージック

日本が誇るトップ・セッション・ギタリストの代表的な仕事をファイル。
そのまま J-POP 史としても読める永久保存版、『佐橋佳幸の仕事 1983-2025 EN』が発売



インプレスグループで音楽関連のメディア事業を手掛ける株式会社リットーミュージック（本社：東京都千代田区、代表取締役社長：松本大輔）は、『佐橋佳幸の仕事 1983-2025 EN』を、2025 年 5 月 20 日に発売しました。

サハシ物語

Biography of Sahashi

駆け足でたどる佐橋佳幸の半生

1. 中学、初めてのバンド結成



幼少期。

小6で始まった“聴いて、弾いて”人生

佐橋佳幸は、1961年9月7日、東京・目黒区に生まれた。

洋楽に目覚めたのは小学校高学年の頃。きっかけは小遣いで買ったラジカセだった。

「70年代前半といえば「セイヤング」や「オールナイトニッポン」といったラジオ深夜番組の全盛期。友達は(吉田)拓郎さんやフォーク系の人のDJ番組を聴いていたんだけど、僕はそっちに興味はなくて、

当時のFEN(米軍福楽放送網、現・AFN)を聴いたりしていました。おっお、日本でも英語の番組が聴けるんだ、と子供心に感動しながら(笑)。あと、同じ頃にラジオ関東(現・ラジオ日本)でやっていたヒットチャート番組(全米トップ40)の存在も知り、洋楽に夢中になるわけだ」

その少し前、音楽好きの息子のために母親が買ってきた1枚のLPも大きなきっかけになった。当時の電芝エクスプレスレーベルから発売されていた「バス・フォーク・カレッジ・ポップス」(1970年)。フォー・セイジ、ザ・リガニーズ、ロック・キャディーズといった日本人



小中学時代。

シンガーが、ボブ・ディランやママス&パパス、ジュニ・ミッチェルなどの曲を日本語詞で歌ったオムニバス・アルバムだ。「なんで母親が僕にそんなレコードを買ってきたのか、今でも謎なんだけど、それをよく聴いていて、外国の曲っていいなと思っていたの。だから、全米ヒットチャートにも違和感なくすりなり入れた。日本でもフォークが全盛だったけど、当時はアメリカのヒットチャートもアコースティック中心の時代だったでしょ」

昭和の早熟な洋楽少年にはたいがい“指雨役”がいる。年上のきょうだいとか、親戚とか、音楽好きな近所さんとか……。佐橋の場合、それは近所に住む大学生のお姉さんだった。当時、佐橋の父親が経営する印刷会社が入居していたビルにファストフード店があり、そこで働く若者たちが時おり佐橋家に遊びに来るようになっていたという。彼女もそのひとり、かなりの洋楽マニアだったようだ。佐橋家に遊びに行くたび自分をやら質問攻めにしてくるおませな小学生にオタクとしての将来性を見抜いたのか、ある日「ヨシユキくん、そんなにレコードが好きなら私の聴いていたのをあげるよ」と、気障く、どきどきシングル盤をくれた。「それがもう今となっては貴重重宝ばかり。CSN&Yの「ウッドストック」のモノラル・シングルとかね。ここでロック好きが一気に加速しちゃうの。その頃、自分の小さくお遣いで初めて買ったアルバムがハバファロー・スプリングフィールドのセカンド「アゲイン」だもん。その次に買ったのがジャ

クソン・ブラウンの「フォー・エブリマン」。今でも好きなもののばかり、というか、小学生の時から趣味が全然変わってないのか(笑)」

そして同じ頃、彼は自分でもギターを弾いてみたいと思うようになる。「レコードをくれたお姉さんの大学での仲間たちも、当然のことながら音楽好き。ギター持って自分たちで音楽をやっている人たちが多かったの。他にも、同級生のお兄さんがフォーク・ギターを弾きながら、当時流行っていた拓郎さんの曲なんかを歌っているところを見たり。そのうち自分でもギターを弾いてみたいと思い始めた。もうひとつ、よくラジオでDJが「シンガー・ソングライター」と言うのを耳にしていたんだけど、その言葉の意味を理解したのとはほぼ同時期だったんだよ。そうか、僕は「シンガー・ソングライター」ってやつになりたいのかなと気づいたんです。自分でギターを弾いて、ラジオで流れているようないい曲を書いて、歌ってみたいなあ……と、自然にそう思ったんだよ。ね。それで小学校を卒業する年の正月、貯金とお年玉をはいてフォーク・ギターを買った。そこからはもうあつという間に「現在に至る」(笑)。好きなものもやっても、小学生の頃から何ひとつ変わっていない。聴いて、弾いて……という一本道をまっしぐら

早くこの段階で、後に誰かが知るようになる「佐橋佳幸」の音楽家としての基本型が完成したわけだ。ほどなく、佐橋は地元の日置山立目黒第一中学校に入学する。

024

025

2. 大江千里「REAL」

この曲でギターを弾いた後、寝るヒでもなくなった!

March 1985 EPIC・ソニー

作詞: 大江千里

作曲: 大江千里

編曲: 清水信之



同世代の“同級生”大江千里との再会

現在はニューヨーク・ブルックリンを拠点にジャズ・ピアニストとして活躍する大江千里。彼がポップス系シンガー・ソングライターとしてEPIC・ソニーからデビューを果たしたのは1983年3月のことだ。一方、佐橋佳幸がUGUISSの員として同じEPIC・ソニーからデビューしたのはその半年後の83年9月。年齢的には大江が佐橋のひとつ上ながら、彼らふたりは同レーベル・同年デビュー・同世代の“同級生”だ。ご存知のように佐橋はこれまで数多くの千里作品、とりわけ大村雅朗が編曲を手がけた作品にギタリストとして参加してきた。

「実はUGUISS時代、プロモーションのために初めてゲスト出演した音楽番組が千ちゃん(大江)のラジオだったの。でも、その後はしばらく縁がなかったんです。なぜならUGUISSは全国のライヴハ

ウスをずーっとぐるぐる回っている生活で(笑)。同じレコード会社に所属していてもなかなか会う機会もなかった。それに、UGUISSと付き合いがあったのはロック系の人ばかりで、当時、ポップスのワールドで活躍してる人のことは、なんか遠く暗いこのほうから見てるっていう感じだった。だから、千ちゃんとの再会はこのレコーディングの現場。“あの時、番組に出させてもらったUGUISSのサハシです”みたいな感じで(笑)」

当時の佐橋といえば、84年末にバンドの解散を発表してからまだ数ヶ月、高校の先輩である清水信之とEPOが所属するヴァーヴ・ミュージックに属し、セッション・ギタリストという新しい看板を掲げたばかりだった。

「なかなか仕事も来なくてヒマだった。それに、そもそもセッションマンの方々と違って、基本、バンドしなきゃだったことなかったから、他の人たちがどんどん入りにレコー

ディングしているのちもよく知らなかったんだよ。だからあの頃はよくノブさん(清水)やEPOさん(セニハ)のスタジオに遊びに……というか、見学させてもらったの。当時、僕にとってメインストリームとの繋がりがといえばそのふたりにしかなかったから(笑)。そうこうするうちにノブさんが千ちゃん(大江)と仕事をするようになって、それで、ある日いきなり、この曲で“お前、ギター弾け”と(笑)」

それが7枚目のシングルにして3作目のアルバム「未成年」の1曲目を擔った「REAL」だった。それにしても、自らも履きたギタリストであるうえ、腕の立つセッション・ギタリストならば他にいくらでも知っていたはずの清水セニハイがここであえてひかひかの新人スタジオ・ミュージシャン、佐橋を指名したのだ。その慧眼と決断力には感服するばかり。

「スタジオ・ミュージシャンの仕事は始めたものの、バンド解散からまだ1年も経っていない。僕としてはまだUGUISSを引きずってる時代だったの。でもたぶん、だからこそノブさんは僕を呼んでくれたんだよ。ね。そんなこともあって、この曲ではめちゃロック・ギタリストの体(てい)で弾いた(笑)。スタジオ・セッションっていうのは言われたことをきき出すにきっちりやる仕事なのかもしれないけど、アレンジャーのノブさんは僕がまだバンドへの未練を引きずっていることを知っていたし、そういうギターを弾いてはしくて僕を呼んだわけだから、通達せず思いつくつやりやう。それがうまいハマったんだと思う。このレコーディングで再会したのをききか

けに千ちゃんとも急激に仲良くなって。その後、大村(雅朗)さんがアレンジを手がけるようになってからもずっとお付き合いが続くことになるんだ

ある時期、佐橋は大村が最初に指名する。いわゆる“ファーストコール”のギタリストだった。佐橋にとってもまた、大村雅朗は編曲家としてもっとも影響を受けたひとりだ。佐橋が大江と再会したことで、大村との信頼関係も育まれていくことになった。が、それらのきっかけを作ってくれたのは全部、清水信之だったわけだ。人生の曲がり角にはいつだって“松原高校の清水セニハイ”がいるのだ……

同世代でどんな曲を書ける人は他にいなかった

「UGUISS時代、僕と千ちゃんとは近くて遠い関係だったわけだけど、それは、千ちゃんは“ロックじゃない世界”の人で、自分たちとは接点がないと僕が勝手に思っていたから。でも一緒にやるようになって、すごい曲を書く人だっていうのを目の当たりにして。あと、スタジオにいる時もいつもノートに思いついたことを書き留めていたんだよ。昔から文学少年だったんだろうな……。レコーディング中も、たとえば西本(明)セニハイのキーボード・ダイビングを待っている時間があつたりするじゃない? そういう間も千ちゃんは一生涯ノートにどんどん何か書いていて、この人は本当に根っからの作家なんだなと思ったわ」

大江千里が書く曲は、背後にジャズ的な洗練されたコード進行を巧みに配する

028

029

佐野元春×佐橋佳幸

司会：堀地祐子 撮影：鈴木千佳 ヘアメイク：吉川清海

自慢するわけではないけれども。

僕は中学生の頃の佐橋くんも知っている。

それが僕は、本当に自慢なんです(笑) (佐野)

振り返ってみると僕は10代の頃からずっと、

佐野さんが次に何をやるうとしているのか

いつも注目してたってことなんでしょね (佐橋)



254

コンサートの予選会場で僕ら好みの音楽をやっていたバンドの、あの“サノさん”というお兄さんとお近づきになりたい、と思った(佐野)

佐橋 僕、ギターを始めた時から数えるともう半世紀くらい音楽をやってきましたけど、僕のことをいざばんぐくから知ってくださっているのは、どう考えても佐野さんなんです。

佐野 だと思ふよ。

佐橋 プロになってからも2023年で40周年。その間、長い付き合いになった方々もたくさんいるんですけど、これまでの活動を振り返ると、やっぱり佐野さんほど僕の歴史を知っている人はいない。だって、ギターを始めては2年足らずだった頃にお会いしているんですもんね。

佐野 うん。自慢するわけではないけれど、僕は中学生の頃の佐橋くんも知っているんだ。それが僕は、本当に自慢なんです(笑)。

佐橋 そうでした。僕は1975年、渋谷にあったヤマハのスタジオか、エビキュラスだった。

佐橋 そうです。僕は中学2年か3年、佐野さんは大学生でした。

佐野 19歳だった。ヤマハのコンテストの時だったか。

佐橋 ポプコンの開東甲信越大会です。フォー・トリオで出場した僕たちは、コンテスト初挑戦で地区予選の本戦まで進んで、特別賞までもらって有頂天になっていたんですけど、佐野さんは同じ予選をそのまま勝ち抜いて全国大会で優勝したんですね。

佐野 僕はバンドで出場していた。曲は「DO WHAT YOU LIKE(勝手にしなよ)」だった。予選会場でその曲を聴いた中学生の佐橋くんが僕のところに来てくれたんだよね。今思えば、音楽的な共鳴がすでにそこにあったんだ。

佐橋 とにかく佐野さんが作られる曲に僕はびっくりして、僕たちはいわゆる音楽好きのナマイキな中学生だったんですけど、今と違って情報量も少なかったし、アマチュアであんなに当時の洋楽テイストを活かした音楽をやっている人なんて見たことなかった。そんな僕ら好みの音楽をやっているバンドの、あの“サノさん”というお兄さんとお近づきになりたい、と思ったわけです(笑)。で、僕の記憶ではコンテストのすぐ後、佐野さんたちが渋谷のエビキュラスで自主コンサートを開催する時に、「君たちも出なよ」って声をかけてくれた。

佐野 そうだったね。覚えてるよ。僕ら、まだみんなアマチュア時代で。

佐橋 そのコンサートで初めて佐野さんのライブをちゃんと観たんです。ほら、コンテストの時はみんな1曲しか演奏できないから。ものすごい衝撃でした。で、その頃、佐野さんはヤマハ渋谷店でけうデモ・テープを録れていたとかで。

佐野 そう。渋谷ヤマハのスタジオをなぜか自由に使える立場にあつた(笑)。

佐橋 そのデモ音源が何曲か入ったカセットをくださったんですよ。そのカセット、まだ実家にあります。

佐野 おおー(笑)。実は当時、ヤマハの人が「こんな新人がいるよ」ということで、

255

ビーター・ゴールウェイ×佐橋佳幸

司会：堀地祐子 撮影：鈴木千佳 通訳：守屋智博



そして、佐橋佳幸が“面白いことになりそう”な予感がするよと表現した瞬間がやってきた。佐橋はビーター・ゴールウェイと改めて本職前にタッグ。彼の新作アルバム制作にとりかかったのだ。本書の中でも佐橋が詳しく語っている通り、これはもとより2023年、佐橋とゴールウェイがリモートでスタートさせたソングライティング・プロジェクトだった。東京とボストンを結んで続けられた作業に手応えを感じた佐橋は、日本のヴィヴィッド・サウンドとともにプロジェクトのアルバム・リリースを画策。当初は佐橋が渡米し現地でアルバムを仕上げる案もあったが、結局、最終的なスタジオ・セッションは東京で行われることに落ち着いた。

こうして2024年11月、ゴールウェイが来日。堀地祐子、矢野顕子、大貫妙子、林立夫、小原真らゴールウェイと録音から“日本風のロック”の立役者をほども、Dr.kyOn、尾數幸太、山本拓夫、松たか子ら、佐橋がもともと信頼を寄せる音楽仲間が勢揃いしたアルバムが完成へと導かれた。ゴールウェイと佐橋は、このプロジェクトおまじりアルバム・タイトルを「EN」と名付けた。

自らの音楽人生をここで暫く休んでくれたのはすべて人との「EN」一瞬。ゴールウェイとの出会いもまた、単なる偶然とは思えない不思議な縁のたまものだった。と、そんなふうに常々語っている佐橋の思いが、そこには強く反映されている。

来日したゴールウェイとのレコーディング初日、2024年11月18日、東京・銀座、音響ハイス・スタジオとやってきたゴールウェイと佐橋に、「EN」へと至る長い歴史を振り返ってもらった。



「EN」ビーター・ゴールウェイと佐橋佳幸
元空中ヴィヴィッドVSCD3245

270

佐橋は僕が驚くことをやってのけてしまう。

「プレイしてくれ」とって頼むだけでいいんだ。(ゴールウェイ)

いや、どんな人ともこうはならないですよ。好きだからできる。(佐橋)

初対面はジョン・セバスチアンの代わりにはビーターさんが来日した時です(佐橋)

佐橋 僕がビーターさんの音楽と出会ったのは高校生の時。フィフス・アヴェニュー・バンドのアルバムを聴いたのが最初です。オリジナル盤はもう、中古レコード屋さんでもかなり高価だったんですけど、でも、聴いてみたくて、そうしたら藤原ヒロシーズという形でその頃のレコードが何枚かまとめて再発されて、安い値段で僕らにも買えるようになったんです。それが出会いですね。それをきっかけにオハイオ・ノックスのアルバムだった。ビーターさんのソロ作品だったり次第に聴いていくようになりました。実際に会えたのはずいぶん後。バード・ハイパーハウスの長門(芳郎)さんから話をもらってビーターさんの来日公演にオープニング・バンドの一日として出演した時です。1987年かな。あれが「初対面でしたよね。ビーター・ゴールウェイ(以下、PG) 僕が初めて日本ツアーをしたのは1978年だけど、その時はまだ会っていないのかな。ラリー・ジョン・マクナリーと一緒に来た時、あの頃、君は十代？

佐橋 イエス(笑)！

PG 僕は30歳だった。1969年から72年にかけて、リプリーズ・レコードからフィフス・アヴェニュー・バンドやオハイオ・

ノックスのアルバムを出して、そのあとソロ・アルバム「ビーター・ゴールウェイ」も作ったんだけど、フィフス・アヴェニュー・バンドが日本で人気になっていたとは知らなくてね。1977年にヨシメネという人から手紙を受け取って初めて、日本に僕の音楽を受けてもらっている人たちがいるってことを知ったんだ。

佐橋 ヨシメネさんという方がとにかくビーターさんの音楽が好きだったんですね。純粋なファンレターだったんですか？

PG そう。僕の音楽が好きというメッセージとともに僕のアルバム写真を手紙で送ってくれた。ちょうどその時、僕は新しいアルバムのレコーディングをしていたので、レコーディングした曲をいくつか選んで、彼がその音源をヴィヴィッド・サウンドに持って行ってくれたんだよね。彼はたぶんヨシメネのことも知っていたんじゃないかな？ この出来事が1978年、初めての日本ツアーとアルバム「オン・ザ・バンドスタンド」のリリースに繋がったんだ。その時のツアーで君と会ったと記憶していたんだ。

佐橋 いえ、初対面はその後の来日の時、ビーターさんが来日して、日本人バンドでサポートするという機会があって、そこに僕が参加したんです。ジョン・セバス

271

作成: 除川哲彦

注:すべての活動を確認しているわけではありません。

282283

文：菊池真平 撮影：植田山月



1961 Fender Stratocaster

50歳の誕生日を記念して、悪態にしているサイケデリズムに頼んで探してもらったという、誕生日のストラト。元のオーナーがハンク・マーヴン好きで、ボディは同じような色味に輸入時からのリフィニッシュされていた。ネックが太くスタジアム・ワーク向きで、ライブではサブのストラトとしてスタンバイさせていることが多い。



1957 Fender Stratocaster

メイプル指板が欲しくなり、1993年に手に入れた1957年製。ショアライン・ゴールドはリフィニッシュで、元はサンバーストだったようだ。フロント・ピックアップは、リンディ・ブレイリンに交換されている。他のストラトには、010-.046の弦を張っているが、このギターには、095-.046を使用。

日本が誇るトップ・セッション・ギタリスト、佐橋佳幸。その名前は知らなくとも、彼が奏でるギターの音や、プロデューサー／アレンジャーとして紡ぎ上げてきたポップでキャッチーなサウンドを耳にしたことがない人はいないはず。80年代に渡辺美里のライブやレコーディングで注目を集めたのを皮切りに、J-POPシーンを代表する数々のアーティストの作品に参加してきた。イントロのカットアップが鮮烈な印象を残した小田和正の「ラブ・ストーリーは突然に」、独自のカントリー・ロック・サウンドを作り上げた佐野元春とのホーボー・キング・バンド、編曲・プロデュースを手がけた藤井フミヤの代表曲「TRUE LOVE」など、数え上げればキリがない。40年を超えるキャリアの中で、彼が関わった膨大な楽曲の中から深いEN（縁もしくは円）を結んだ「40曲」（別掲）を選び、その曲で彼が何を考え、どんな仕事をしたのか、本人取材をもとに徹底的に掘り下げる。

●セレクトされた 40 曲

①「Sweet Revenge」UGUISS、②「REAL」大江千里、③「Long Good-Bye」太田貴子、④「Self Control」TM NETWORK、⑤「12 月の雨」EPO、⑥「GET READY」宮原学、⑦「センチメンタルカンガルー」渡辺美里、⑧「僕にはわからない」佐橋佳幸、⑨「ステーションワゴン」鈴木祥子、⑩「Travelling Girl」桐島かれん、⑪「あなたに会えてよかった」小泉今日子、⑫「ラブ・ストーリーは突然に」小田和正、⑬「クリといつまでも」SUPER CHIMPANZEE、⑭「湖のふもとでねこと暮らしている」矢野顕子、⑮「花」喜納昌吉、⑯「Always」ロッテンハッツ、⑰「もう恋なんてしない」槇原敬之、⑱「渋谷で 5 時」鈴木雅之（w/菊池桃子）、⑲「TRUE LOVE」藤井フミヤ、⑳「タイム・パッシズ・オン」佐橋佳幸、㉑「Hello」福山雅治、㉒「POESIA」坂本龍一、㉓「魂を抱いてくれ」氷室京介、㉔「瞳の扉」（『ポポロクロイス〜はじまりの冒険』OST）SIE サウンドチーム（歌：marhy）、㉕「TOKYO FANTASIA」山下久美子、㉖「1/2」川本真琴、㉗「硝子の少年」Kinki Kids、㉘「風の手ひらの上」佐野元春 & ザ・ホーボー・キング・バンド、㉙「Song for James」山弦、㊀「毎日がスペシャル」竹内まりや、㊁「花のように」松たか子、㊂「夢を聞かせて」小坂忠、㊃「緑の風」大貫妙子（大貫山弦妙子）、㊄「ボクノート」スキマスイッチ、㊅「風が吹いている」いきものがかり、㊆「Still Standing」Char、㊇「J-Tea」Darjeeling、㊈「海月〜UMIZUKI〜」スターダスト・レビュー、㊉「人力飛行機」山下達郎、㊀「オン・ザ・バンドスタンド」ピーター・ゴールウェイ

さらに、幼少期からの生い立ちを綴ったバイオグラフィー、詳細な年表、愛用ギター・コレクション、佐野元春、ピーター・ゴールウェイとの対談も加える。「佐橋佳幸の 40 曲」は Re:minder (<https://reminder.top/>) での連載に加筆修正したもの。

■書誌情報

書名：佐橋佳幸の仕事 1983-2025 EN

著者：能地祐子

定価：2,750 円（本体 2,500 円＋税 10%）

発売：2025 年 5 月 20 日

発行：リットーミュージック

商品情報ページ <https://www.rittor-music.co.jp/product/detail/3125351001/>

CONTENTS

- ・ライブ・グラフ／愛用ギター・コレクション
- ・佐橋佳幸物語
- ・佐橋佳幸の「40 曲」
- ・対談 1 佐野元春×佐橋佳幸
- ・対談 2 ピーター・ゴールウェイ×佐橋佳幸
- ・活動年表

PROFILE

能地祐子（のうじ・ゆうこ）

1964 年、東京生まれ。音楽評論家。洋楽から J-POP、歌謡曲まで多岐にわたるジャンルの評論、紹介記事を、『ミュージック・マガジン』や朝日新聞等で執筆。旧譜再発の企画・解説、ラジオ・TV などの構成も手がける。2015 年には佐橋佳幸の音楽生活 32 年分の仕事をコンパイルした『佐橋佳幸の仕事（1983-2015）～Time Passes On～』（CD3 枚組）を企画・プロデュースした。

【株式会社リットーミュージック】<https://www.rittor-music.co.jp/>

『ギター・マガジン』『サウンド＆レコーディング・マガジン』等の楽器演奏や音楽制作を行うプレイヤー＆クリエイター向け専門雑誌、楽器教則本等の出版に加え、電子出版、映像・音源の配信等、音楽関連のメディア＆コンテンツ事業を展開しています。新しく誕生した多目的スペース「御茶ノ水 RITTOR BASE」の運営のほか、国内最大級の楽器マーケットプレイス『デジマート』や T シャツのオンデマンド販売サイト『T-OD』等の Web サービスも人気です。

【インプレスグループ】<https://www.impressholdings.com/>

株式会社インプレスホールディングス（本社：東京都千代田区、代表取締役：松本大輔、証券コード：東証スタンダード市場 9479）を持株会社とするメディアグループ。「IT」「音楽」「デザイン」「山岳・自然」「航空・鉄道」「モバイルサービス」「学術・理工学」を主要テーマに専門性の高いメディア＆サービスおよびソリューション事業を展開しています。さらに、コンテンツビジネスのプラットフォーム開発・運営も手がけています。

以上

【本件に関するお問合せ先】

株式会社リットーミュージック 広報担当

E-mail: pr@rittor-music.co.jp